

伊藤信孝

コンケン大学客員教授・工学部

本報ではかつての「留学生に感謝」の気持ちを表しておきたい。人から情けを受けると、素直に有り難いと感激し、一時的にその思いを心にとどめておくのは誰しも人間であれば共通した思いかと考える。また交通事故などにおいても遭遇した直後には、咄嗟に事故回避に向けて自らがとった行動、対応、処置への記憶をさかのぼろうと記憶を辿る。いくらかでも自分に過失があるのではないかと判断したときには、「本当に悪いことをした、あのときにあのような行動を取らなければ良かった」と反省し、かなり謙虚に自分を見つめ直す。しかし、事故から日にちが経ち交通事故の記憶が薄れてくると「ひょっとして自分は悪くなかったのではないか、むしろ悪いのは相手側ではないのか」などと思うようにもなる。自らの思いのみならず、当事者を取り巻くいろいろな人がいろいろな意見や助言、勝手な判断に、基づく無責任なことを言い放つから、当事者の思いも「なるほど、そう言割れると、そうなのか」と思い直す。そして最後には「私は悪くはなかった、悪いのは相手側だ」などと言う真逆の判断に及ぶこともある。交通事故はどちらが良いか悪いかはともかく、一度起きれば取り返しの付かない結果にも成りかねない。後遺症で事故の処理が終わってからも苦しまなければならないし、自分とはともかく相手側を傷つけた場合は、今まで何の関係もない見知らぬ間に取り返しの付かない溝を作る事にもなる。また車や乗り物などの物損事故にとどまらず双方の精神的な苦痛や、人間関係にも大きなしこりを残す。事故直後の気持ちは当事者本人も精神的に気持ちが動転しているから記憶間違いや、誤解、判断のミスなども多くある。しかし交通事故ほどロスの多いものは無い。どれひとつをとっても損失であり、得になる事はひとつも無い。しいて挙げれば、幸にして軽い処置で回復し、後遺症も残らず、双方共に「袖すり合うも多少の縁」という程度で和解、解決し、事故の愚かしさや無駄、ばからしさを学ぶと言う事があればそれこそ「事故から学ぶ」と言う「2度と得られない経験」にもなるが、それ以外にメリットになる場合は殆ど無い。保険や法律もあまり頼りにはならない。加害者扱いされている側が実は本当の被害者という場合も少なくない。

翻って他人から親切にされ、お世話になるときは、それこそ「人の親切が身にしみて分かる」のが一般的である。時代の移り変わりに伴う世の中の変遷は人間の考え方や価値観を変え、常識やエチケット、マナーを根本的に覆し、利己的な行動やダブル・スタンダードが堂々と当たり前の様に横行する。日頃すさんだ人間関係の中で社会の矛盾や不条理を見ている人間にとっては、わずかな親切も、心に染みるほどの「ありがたさ」に感じる。その時に受けた「親切」のありがたさも時の経過と共に徐々に薄れ、ついには忘れて凍ししまう事が多い。親切を受けたその時は「ありがたい」と言う気持ちはあるが、何とかお礼

をと思いつつも、即座にから謝意を行動に表せず、時期が過ぎると、「まあ、いいか。次ぎにまたその機会もあろう」とやり過ぎしていると、その振る舞いが日常化、あるいは恒常化し、人の情けを理解できぬ人間になってしまう。人間形成を主たる目的とする大学から、かけ離れた異なる人間が形成されることになる。「世の中に情緒がない」殺伐とした社会が出来上がる。今のコロナ禍の状況はそうした社会を作る危険性を醸し出している。人と人の接触を断ち、各自の移動を制限し、交流や情報の自由が極端に規制され、何時になればそうした事態が解消されるか、予想も付かないカオス状態である。高度情報化機器はその不自由さをいくらか解消することに寄与しているが、その反面情報に含まれている「嘘」も多い。フェイス・ツー・フェイスでの相互友好、相互信頼が築かれないから、見せかけの関係で終わることも多い。

筆者もチェンマイ大学からコンケン大学に移りほぼ9ヶ月が経つ。3度の90日レポート提出を終えたが、日常生活の事態に全く変化はない。直接会うことが極端に制限されているから、移動することはできない。話をするにも電話やメール、オンライン以外の手段はない。書いた文書では誤解も多い。正確に伝わることが危ぶまれる事態もある。不必要な摩擦や関係悪化につながるケースも少なくない。コロナ紀元説がいろいろ取りざたされているがはっきりしないから、その鬱憤を持って行くところがない。関係ない他人に愚痴を言い、憂さ晴らしで関係のない物を壊す。さらに、何時解消されるのかと言う目処が立たない。収束したかと思うと急激に盛り返し、新種の変異型だと言う。意図的な発症と疑う人が出てきても不思議ではない。そんな苦しい状況の中でのコンケン大学で、筆者も同じように生活をして居るが、ルーチン化した日常生活は夜の10時頃に就寝、深夜を過ぎた2時半から3時に目を覚まし、洗面、シャワーを浴びて5時過ぎに簡単な朝食の準備、6時から定番のユー・チューブ番組を見ながら朝食を取り、7時半にアパートを出て大学のオフィスに向かう。40分ほどをかけて4500歩ほどを歩き、8時15分から8時30分頃にオフィスに到着。昼食はキャンパス内の売店で仕入れたサンドイッチと湧かしたホット・コーヒーで済ませ、適当に仕事に臨む。当初から授業も講義もその負担には含まれて居ないので、義務的な仕事はない。義務に相当する仕事と言え、インタナショナル機関への研究プロポーザル2編程度の提案作成と提出、院生、若手研究者の研究論文の校閲、投稿指導、学生・院生10人ほどに海外研究機関（大学、企業など）を見せる機会の授与、と言うのが主たる役割、義務であるが、長引くコロナ禍では身動きがとれない。連絡をしても実際の移動、相手機関訪問は実質不可能である。コロナ禍の終焉が予測できないから予定も立たない。果たさなければならない義務感とそれを実施できない現状が筆者を苦境に陥れる。オンライン・セミナーなど催しがある内はまだしも、余り予定がないと何すべきかと言うことにさえ戸惑う。仕事の進展が目に見えないと張り合いがなくなり、やる気を削がれる。夕刻18時頃に仕事を終えてオフィスを後にする。もちろんアパートまでは徒歩で40分前後である。途中で買い物をしたり、屋台で簡単な夕食を済ませてアパートに帰り着くと19時から19時半である。その日のニュースをユー・チューブで見て情報源としている。もち

ろん興味あるドラマや科学番組があればそのために時間を割くが、それも10時(22時)頃までである。そして就寝、そこまでしてほぼ4時間の睡眠を経て、早朝の2時半か3時に起床と言うのが日常のルーチンである。週末の土、日もこれと言って行くところはないから、行き着く場所は大学のオフィスである。毎日「歩く」事が健康維持に良いことを念頭に、雨が降ろうが敢えて出かけると言う姿勢を崩していない。毎日10000歩が目標であり、この歩行の継続が健康を維持していることを肌で感じている。幸にもこれまで異常と思われるところはない。有り難い話である。このような状況の中で不満を言っているのは罰が当たると、思うのであるが、やはりこれまでのコロナ禍以前の状況と余りにも異なる異常な環境につき愚痴や不満が出る。そうした中で、唯一心底より「有り難い、申し訳ない」と感じるのがかつての留学生の存在と対応である。困ったことがあると気楽さも手伝い安易に物事を依頼する。相手は博士課程を終えて帰国後10年以上、教員として勤務しているから、自らが勤める大学を知っていてあたりまえと言えよう。一方筆者は赴任してから1年未満のよそ者である。ましてやこのコロナ禍で身動きがとれないから、多くの場合、ひとりぼっちである。隣にスタッフがいるが事務職員であるから話し相手にもならない。いわゆる共通の話題がない。また昔の公務員的意識であるから、あまり仕事をしなからぬ。

筆者のために仕事をして欲しくはないが大学のために仕事をするという意識がない。何処の大学でも公務員的職員に共通した意識である。ファカルティ・デイベロップメントと同様にスタッフ・デイベロップメントの必要性を強く感じているが、そこは雇用者と被雇用者という立場の違いを考えると下手に低減することが此方の解雇になるのではとの懸念もあり、容易に言い出せない。そこで行き着く先が、気心の分かった、かつての留学生と言う事になる。彼も自身が負担すべき仕事があるため、此方の好きなときに願いを持ち出しても不都合なこともある。だから普段は殆ど没交渉である。連絡はメールとラインが主流である。タイは米国に似て公的交通機関はないし、殆どが車での移動である。極端に言うと、車がないと何処へも行けないと言う状況である。健康診断のための病院までの送り迎え、診断中の付き添いと通訳、オンライン・セミナーでのPCの調整、診断、設定、彼自身の企業訪問時の同行、1週間に1度のショッピング(買い物)など、文字通り「至れり尽くせり」の対応で本当に頭が下がる。かつては留学生の指導教員としての立場であったが、今ではその立場は完全に逆転している。此方が教わる方である。かといって教わることを恥じていると物事が先に進まない。低学年の児童並みに恥ずかしげも無く聞きまくる様にしている。おかげで何とか時代について行けていると感じている。今更かつての指導教員だと過去の立場を強調為しても何の意味も持たない。日本人は恥を重んじる文化を有すると言うが、「聞くは一時の恥、聞かぬは末代の恥」と開き直っている。それだけにその無理な要請に、敢えて対応をしてくれる彼に心より感謝している。ではかつて自分はこれだけの対応を指導教員としてなしたかと顧みるとき、その答えは少々疑わしい。もともと能力のある学生であったから、その実力に疑いの余地はない。むしろ受け入れ教員として自らの能力に自信を持てなかつたくらいである。受け入れ要請を依頼してきたのは他なら

ぬ元学長であり、課程修了に必要な奨学金も付してである。空港に出迎えに出た一行は元学長とお付きの 2, 3 名と彼を含む 4, 5 名であったと記憶する。いつものことながら海外からの訪問者については、教員に限らず留学生についても、人数に限らず直接自ら空港まで迎えに出向く事を心がけてきたから、このときもその信条に従ったに過ぎない。3 年間の留学期間で学位取得を成功させなければならない。自分としてはこれと言って指導をしたと言う記憶は無いが、筆者の持論を持ち出すならば、学位取得は 70% が取得を目指す留学生本人の努力、20% は指導教員のガイダンスと諸手続を含む助言と支援、残り 10% は運と考えて居る。したがって彼の場合もこの方針から余り外れた対応ではない。学位取得の必要条件は博士課程を終える迄に国際学会誌に英文で 2 編の論文が受理、あるいは掲載される事である。必ずしも英語での口頭発表はなくても論文が掲載されていれば良いという判断もあるが、彼の場合に筆者がとった対応は「国際学会に出席参加し、口頭発表と共に論文投稿する」という事であった。博士課程 3 年目での最後に仕上げと言う事で、彼に「国内外を含め、博士課程での成果を口頭で論文発表をするため、近々開催が予定されている適当な国際学会を探せ」と指示し、口頭論文発表の機会を探させたところ、デンマークのアールボルグで開催の国際学会があることを知った。奨学金を支援して貰っている財団に、「博士課程在籍中に国際学会での発表が学位取得の必要条件」である事を説いて、参加費の支援を求めた。幸い申請額の半額なら支援しても良いと言う返事を頂き、筆者と 2 人で参加することを決心した。驚いたことに、彼は過去においてもこの大学を訪れたことがあると言う。彼の兄弟の一人がこの大学と交流があり、彼にとっては見知らぬ所でもなければ、いくらか知人もいた。また筆者に取ってはデンマーク訪問も初めてであり、双方に取っても有意義な訪問参加となった。うすら覚えではあるが、確かその時の国際学会の名称は **Euro Sustainability** であったかと記憶する。いろいろ聞いてみるうちに日本の大手自動車企業が殆どスポンサーとなっているということが分かった。このときの学会参加時期は現地で雪が降り、空港からホテルまでのタクシーも雪の中での走行であった。物価は日本と比べると結構高く、コカコーラの普通のボトル 1 本が日本円で 400 円程であったことを鮮明に覚えている。まさか雪が降るほど寒い気候とは知る由もないからオーバーやコートなどは持って行って居なかった。しかし学会に出席するにはホテルから会場まで行き、寒さに耐えねばならない。咄嗟にホテルで対応に出たスタッフに、「申し訳ないが、防寒コートを持ち合わせていない。誠に申し訳ないが、オーバーコートか何か、それに類す防寒衣類があれば借りられないか？」と尋ねて見た。すると極めて快く「私のオーバーをお貸ししよう、使ってくれ」と快く貸してくれた。それもその日 1 日だけではなく、「学会の会期中使って頂いて良い」と言う、有り難い話しである。滞在中 2 日ほどは研究発表で所定のセッションでの発表に備え、残り 2 日ほどは、留学生の彼がかつて来た事があるというアールボルグ大学を訪問することにした。汽車に乗り、30 分ほど、駅の数にして 5 つから 6 つを乗り、彼の案内で企業を訪れた。丁寧なおもてなしを受け、話しにも花が咲いた。また別の日にはその大学を訪れバイオマスエネルギー関係の施設を見学した。バンケットに

居合わせたこの大学の教員の一人が、冗談交じりに話しかけてきたことを覚えている。「現在EUは25ヶ国が加盟しているが、26番目に加盟を希望している国があるが、貴方は知っているか？」と言う。答えに困っていると「それはUSAだ」と言う冗談であった。今では参加国数も増えているが、一方最近では英国のEUからの離脱(BREXIT, ブレグジット)が決まったことは周知である。

デンマーク往復1週間程の国際学会出席の旅は、このようにして終わったが、筆者にはこの旅行の後也多忙な、しかもきわどい旅が残っていた。すなわちこの旅行から帰国した後、折り返しインドネシアでの学会に出席の予定があった。それも、きわどい日程で、冷や汗ものと言うほどの綱割りを昔はしたものだと言いつつ驚きである。ついにながらこの事についても付記しておく。ヨーロッパから飛行機が名古屋空港に到着するやいなや別の飛行機で今来た道程を引き返しインドネシアに向かうと言う予定である。到着後荷物が出てくるのを今か今かと待ちながらコンベアを眺めていると、やっと自分の荷物が出てきた。早速名古屋発の航空会社のスタッフに、今荷物を受け取ったのでこの荷物を持ってチェックインカウンタに向かうので予め連絡して置いて欲しい、と依頼し機上の人となった。学会に同行した彼には残りの金を預け、大学に戻り、三重大学を訪れているタイの大学の教員数名の接待をしてくれるよう依頼してインドネシアに向かった。おりしも、このときに名古屋で万博が開催されていたので、折角の機会でもあるからここへもお連れして欲しいと依頼しておいた。必要ならこの金を全部使っても良いと言い残しておいたが、結果としてタイからの教員側から「せっかくのお志だから」と言う事で入場料だけを此方で負担したと報告を受けた。そう言う背景もあって筆者はタイの大学からの先生方をもてなす機会も無く失礼した。彼は筆者が帰国後、筆者から預かった金額について詳細な報告をし、残金を返してくれた。思うように使っても良いと言ってあったが、おざなりな扱いではなく、きちんとした対応に(当然と言えば当然かも知れないが)感心した次第である。いわゆる責任を持った、信頼のおける対応と言う高い印象を受けた。その様な彼だけに、現在も対応はきめ細かで、協力を惜しまず、時間厳守、確認など筆者の手の届かない、かゆいところに手が届く対応に本当に感謝して居る。海外留学を経験した多くの留学生が自国に帰国後、日本で学んだ良いところを踏襲している礼は極めて例外に見える。というのはその他の大勢が、どっぷりとタイ式の生活に戻り、言いにくい話しであるが、いささか相互信頼を欠く生活様式に浸る例を余りにも多く見てきているからである。しかし「彼は違う」と言う信念すら覚える。単に相互に馬が合うとか言うのではなく、その未だ先にある深い所の底に確信できる信頼間を感じ取ることができる。学術的には、これと言って高度な物を授けることはできなかったが、非常に重要な、金銭で勘定する事が出来ない貴重なものを彼は理解し、引き継いでくれたと言う点に誇りすら覚える。あらためて書くつもりであるが、やはり「相互信頼の構築」が人と人との良好な関係を促し、育み、次世代への人材育成にも大きな貢献、寄与となるものと考えている。みせかけの、表面だけの作り衣装では、その真価は分からない。今は筆者は彼の手のかかる生徒であり、教える側も教わる側

も謙虚に相互に持てる物を惜しげ無く供与できる関係になりつつある。それには相互に努力することが必要であり、努力により相互に進展が無ければ、関係は維持されない。年齢も重要であるが、まずは相互信頼を築き尊敬できる物が相互になければならない。現状では筆者が彼に与えることができるものは極めて少ないと思うが、金では買えない高価なものを伝承、移転できれば最高である。

タイに限らず、特にアジアの国からの留学生の受け入れ、面倒見、世話を携わってきたが、縁あってタイからの留学生受け入れに関しては特に思いが強い。そうした背景もあって、現職時代は学部を問わずタイの留学生とは懇意に接してきた。タイを訪れると留学生が必ずと言って良いほど出迎えてくれて、殆ど何もせずに指示に従っておればほぼ自動的に目的地に行き、所定の人に会うことができた。またバンコックを訪れると遠く離れたチェンマイやコンケンからもわざわざ飛行機でやってきて、懇親会に出てくれる人なつこさも良好な人間関係を維持する要素と認識している。しかし、時の経過と共に彼ら留学生も祖国に戻り、職を得て、やがては結婚し、家族を持つと言う過程を経ると同時に、彼らも筆者までも何時を構っておれなくなる。留学生の多くの結婚式にも参席し、祝意を示すと共に更なる未来への励ましの機会も得た。いざ、彼らがそうした形で時間的にも、筆者の相手をする時間が少なくなるのは自然である。一人になると如何に彼らの目に見えぬ支援が大きかったかを知ることになる。全て彼らに「おんぶに、だっこ」と言う形であったから、一人になると何事も自分でやらなければ成らない。現地語のタイ語もできないから移動も難しい。これまでの蓄積で築いたネットワークのみが「頼りの綱」であり、今でもこのネットワークは機能している。しかし、この事から学んだことは常に前向きに、新しい事への挑戦、今流に言えば生活が持続可能な形でなければインパクトも魅力も与えないから、そうでない形での生き方の対応では、「人は自分から離れていく」ということである。それでなくても世間は「一度定年退職を終えた老いぼれが、何を今更・・・」という目で見ているからである。進む速度も遅くてはいけない。それなりに付いていける速度、あるいは他の人がやっていない、あるいはしていない分野の知識習得に向かっていかなければ成らない。速度が遅いと足手間どいとなり、反って他の人や組織の進展、活動を妨げる事になる事を認識して居なければならない。幸いなことにコンケン大学でのかつての留学生も2児の父親であり、2人も両親の手から離れ、大学生としての生活をしている。育児も終わり、教育の時期を迎えている。そんなわけで、彼が家庭に注ぐ時間の割合は少なくなっていることが筆者には幸運であったと感謝している。だからこそ多くの時間を筆者に注いでくれていると感謝している。